茅(かや)葺(ぶ)き写真展

増補版

旧小川家の全面葺き替えの記録｜文化百花ウェブ展示

旧小川家住宅について

この住宅は江戸時代の中期（1700 年代前半 ）に上和田（久田）に建てられたものです。市域に現存する最古の民家として昭和５９（1984）年に大和市指定重要有形文化財に指定されました。同年に解体され、部材は市によって一時保管されました。

旧小川勝氏住宅（昭和５９(1984) 年｜上和田久田）
『大和市史８下』より転載

移築後、初めての葺き替え

平成５（1993）年に上草柳（泉の森内）に移築復原され、平成６（1994）年に郷土民家園として開園しました。移築してから２０年以上が経ち、屋根の劣化が著しいことから令和３（2021）年３月より全面葺き替えをすることになりました。

市域の茅葺き屋根

戦後は茅の供給が徐々にできなくなったこと、また囲炉裏やかまどが使われなくなり屋根材の傷みがひどくなったことなどから、昭和５０年代には屋根は茅葺きからトタンや瓦葺きに変わっていきました。

現在「茅葺」を含む伝統建築技術は、令和２（2020）年にユネスコ無形文化遺産への登録が決定し注目されています。市内で茅葺き屋根の全面葺き替えが見られるのは大変貴重な機会です。

大和市郷土民家園での屋根葺き（平成５(1993)年｜上草柳）

蓄えられた屋根茅（大正１０(1921)年｜下和田）

屋根葺きの道具

写真はいずれも『大和市史８下』より転載

２０年以上雨風に耐えた屋根には苔が生え、所々カラスなどによって茅が引き抜かれています。
葺き替えたばかりの頃に比べると屋根の厚みも薄くなっています。（2021 年 2 月 16 日撮影）

かまどで焚く薪の煙が、茅葺屋根の防虫・防腐になります。民家に入り見上げてみると屋根の竹材や茅は黒く燻された色になっています。（葺き替え前｜屋根の内側｜2021 年 2 月 16 日撮影）

（葺き替え前｜棟｜2021 年 2 月 16 日ドローン撮影）

河津桜と梅の咲く頃、工事用に仮囲いがされ、茅が運び込まれました。

（葺き替え前｜2021 年 2 月 26 日ドローン撮影）

搬入された茅を葺くのに適した葉の量にする作業（茅すぐり）をし、屋根面を葺くための材料をこしらえています。屋根裏に見える一番下の化粧茅をまとめています。（2021 年 2 月 26 日撮影）

茅葺で使う道具は基本売っていないため、職人が自分で作ることがほとんどです。茅をすぐる（すいて葉を少なくする）この道具も職人が使いやすいように作ったものです。(2021 年 2 月 26 日撮影)

古い茅を取り除く作業は「茅零し（かやこぼし）」といわれています。上から順に茅をおろします。
古茅（ふるがや）の一部は、新しい茅と共に再び使われます。（2021 年 3 月 4 日ドローン撮影）

（茅零し｜2021 年 3 月 4 日ドローン撮影）

平成５（1993）年に組まれた下地の竹材は、かなり損傷していました。燻された竹材は茶道具などに再び使われることもあります。（古い茅をおろした後の屋根下地｜茅零し｜2021 年 3 月 4 日撮影）

（古い茅をおろした後の屋根下地｜茅零し｜2021 年 3 月 4 日撮影）

古い竹が取り除かれ、屋練り（やねり）と呼ばれる下地を組む作業に移ります。木材には交換が必要な傷みはありませんでした。（茅零し後｜屋練り｜2021 年 3 月 16 日撮影）

（屋練り｜2021 年 3 月 16 日ドローン撮影）

古茅がおろされたことで古民家の中に日光が注ぎ、約３００年前に建てられた当時から使われている木材がよく見えます。（屋練り｜屋根の内側｜2021 年 3 月 16 日撮影）

下地の竹や木材が交差する部分 1 か所 1 か所を職人が縄で縛ります。縄は質の良い福井県産の荒縄を使用しています。（ 屋練り｜2021 年 3 月 16 日撮影 ）